

Title	キリスト教内に非会員日本人 : I その役割と性格について
Sub Title	Japanese laymen in the early Jesuitic missions : (I). on their labors and individualities
Author	柳田, 利夫(Yanagida, Toshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1978
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.48, No.4 (1978. 3) ,p.43(379)- 77(413)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19780300-0043">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19780300-0043</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# キリストン教会内の非会員日本人

## I その役割と性格について

柳田利夫

キリストン教会と日本人との関係について従来の研究では、甚だ観念的な思想受容論は論外としても、布教成果——日本人聖職者養成・登用、天正遣欧使節、キリストン大名——の面から論ぜられて来たと言える。これらの問題は

当時の宣教師団にとつても、また今日のキリストン研究者にとっても、非常に大きな問題であり、先入観を排した研究が我々に示すであろう意義は少なからざるものとなるに違いない。ところが、多大な関心がこの種の布教成果にかかる問題に払われて来たのに反し、その根本となつた教会自体の構成や日常活動の維持に関しては、ほとんど関心が払われずに来てしまつた。しかし、教会の日常的な基盤

——日本聖職者養成・登用、天正遣欧使節、キリストン大名——の面から論ぜられて来たと言える。これらの問題は

当時の宣教師団にとつても、また今日のキリストン研究者にとっても、非常に大きな問題であり、先入観を排した研究が我々に示すであろう意義は少なからざるものとなるに違いない。ところが、多大な関心がこの種の布教成果にかかる問題に払われて来たのに反し、その根本となつた教会自体の構成や日常活動の維持に関しては、ほとんど関心

が払われずに来てしまつた。しかし、教会の日常的な基盤

仕人 gente de serviço・剃髪者 rapados 等――を用いたりしているが、その役割や性格及び相互関係といった事柄について史料はあまり多くを語っていない。また研究自体も、同宿の一部について行なわれて来たにすぎない。しかも、その研究は同宿の聖職者予備軍ないし援助者といった面を殊更とりあげて論ずる傾向を持っていたようである。

そこで、この小報告では、まず第一に、概括的な非会員

日本人の分類を行なつておく必要があると思われる。結論から言えばイエズス会教会内の非会員日本人は大凡四つに区分する事が可能である。第一に同宿のグループ、第二にモッソ moço ないし小者のグループ、第三に看坊、最後が殿原のグループの四区分である。また、この四区分のうち前三者については更に各グループ内に細かな区分が存在していたようである。<sup>(1)</sup>

果もあり、将来イルマン Irmão やペーデン Padre によるべく教会で奉仕してゐる剃髪者といった程度の認識が広く為されて來た。また彼等の役割としては、ミサ仕えやカテキスタといった面が強調されて來ている。ロペス・ガイド布教におけるカナカアーラ canacapoles との類比をもつて論ぜられている。師もやはり、同宿を布教上の聖職者援助者としてとらえているようである。<sup>(2)</sup>

ところで、同宿という日本語が使用されてゐる史料のうち比較的早い時期に属すると思われるものに一五八一年九月五日付で当時日本布教長であったフランシスコ・カブラル Francisco Cabral が書き送った書翰がある。そこには、「田杆から因レーグワのところに野津の住院 residencia があり、そこには一人のペーデンと日本人イルマン、それに二人の日本人青年が会員ではないが、教会で会員として認められる希望を持つて奉仕している。彼等は同宿と呼ばれている。」<sup>(3)</sup>

既に述べたように、同宿の一部に關しては一応の研究成

また、一五八〇年一〇月に豊後で行なわれた協議会の議事録には、「同宿のように我々の修院 casa で奉仕するモツソについて」という諮問が一六番めに提出・討議された事が記されている。<sup>(4)</sup> ヴァリニャーノ Alexandro Valignano の第一次日本巡察に際して何度か協議会が開催され、(前述の一〇月の豊後の協議会もその一つである) 長崎で最後にそれらの総括として、第一回総協議会 primera consulta general が行なわれたのであるが、そこでも、やは

り一六番めに、「我々の修院に生活している同宿について」という諮問が提出され、討議が行なわれている。その議事録には、冒頭で日本語の同宿について一般的な解説が為され、それに続けて次のように記されている。

この理由は、同修院の援助や奉仕のために彼等は本当に必要なのであるからである。というのは、彼等は通訳であり、教理を教える者であり、伝言を受けたり伝えたりする者であり、埋葬の手助けをし、イルマンがいない為に我々が行なうのはうまくない交際や修院の仕事の大部分を行なつてゐる者だからである。<sup>(5)</sup>

これらの史料を見る限り、同宿は聖職者に対する布教上での手伝いをする者という性格を濃厚に持つていたと言えるようである。

一五八〇年一〇月、ヴァリニャーノは在日イエズス会士の為に『日本の習慣や氣質 catangues についての助言と忠告』(以下、『助言と忠告』) と題する小著を作成している。その一一四項には、はじめにペーデンやイルマンの外出時に同行せるべき者についての指示がなされ、それに続けて以下のように述べられている。

「そして同宿は、彼が奉仕の同宿 dogicos de servicio で育てられ、生活しているのであり、これらの者を除いたら我々は決して日本人イルマンを持てないであろう。第二

住院にいる場合を除き、おとなでも子供でもいいから履物の世話をするためのモツンをひとり連れてゆくように。<sup>(6)</sup>」これ以外の史料で「奉仕の同宿」という表現を今までのところ見ていないが、この史料によれば、奉仕の同宿は、他の同宿より低いものと見做されていたものと考える事ができよう。次に同書一一七項には

「老年、あるいは人々から尊敬されている布教師の同宿 dogico pregador」は許可を得れば、帽子を被つた儘でペーニャやイルマンと会話する事が許せると記されている。<sup>(7)</sup>この布教師の同宿については、前述の第一回総協議会の議事録にも記載されており、ヴァリニャーノは裁決において、彼等に対し食卓での奉仕を免除している。この事は同時に、布教師の同宿以外の同宿は食卓で奉仕していた事を示していると記述される。<sup>(8)</sup>同宿の具体的な仕事については、後に述べることとして、これまで述べて来たところから、同宿の中にある種の特権を付与された布教師の同宿や、反対に他より低く見做されていたと考えられる奉仕の同宿といった区分が存在していたと推定し得る。(なお、

この両者の間に、一般的の同宿とでも呼ぶべき者が存在したと思われるが史料上にそのような表現は見られない。)更に、セミナリョで学習している者もまた、同宿と呼ばれていたが、これについてはイエズス会の教育機構や日本人聖職者養成といった視点から為された多くの研究に譲り、こではあらためて触れないことにしたい。<sup>(9)</sup>

また、同宿の他の区分として、一五九〇年八月一二日<sup>(10)</sup>一五日にわたり、ヴァリニャーノの第二次日本巡察の一環として開催された第二回総協議会 Segunda Consulta General 諮問一三には、修院の共通の仕事に携わる同宿と、ペーニャやイルマンに随伴する同宿とが示されている。この区分は、ヴァリニャーノが定めた『同宿の規則』Regras para os dojucus の中では、第三項に見る事ができる。<sup>(11)</sup>しかし、この区分が、前述の布教師の同宿と奉仕の同宿との間の様な、階級に近いものであつたかどうか明らかではない。

次に同宿の役割を布教活動に直接かかわらない面を中心にして見てみたい。

先に引用した第一回総協議会の議事録によれば、同宿の役割は通訳・伝言の授受、埋葬の援助、その他交際や修院の仕事に携わるというものであった。修院の仕事というのは漠然とした言い方ではあるが、その一つに前述の食卓での奉仕をあげることができるよう。ところで、『助言と忠告』の三〇項めには、

「何か伝言を持つてやって来る人と最初に話をしに行く門番 Porteiro [当時の日本流に言えば「奏者番」とでも言うべきか] の役目をイルマンは修院でやらないように。同宿か、有髪の者であつても良いから修院の誰か他の者がこの仕事をせねばならない。そして、この仕事をする者は、ペーダレやイルマンにやって来た者が誰であるかを知らせ……。」

この他に、前述の議事録には、茶の湯や盃での接待なども同宿の仕事として示されている。これらの仕事に対してもヴァリニャーノはやはり規則を作成している。茶の湯に関する道具や座敷の管理・接待についての注意などをおりこんだ『茶の湯者の規則』 Regras para o chanoyuxa と『禁制』 Quinsey がそれである。<sup>(14)</sup> この茶の湯者や先程の門番は双方とも結局交際にかかわる仕事に就いており、来客（泊客）の世話をするイルマンの指揮下におかれていたと考へられる。<sup>(15)</sup>

一五九二年のカタログには、聖堂係・食堂係・茶の湯者の伝言の授受・ミサ、埋葬等の儀式の援助等が同宿の役割として列挙されているが、その他にペーダレに同行する同宿の存在（ペーダレの同宿）についても言及されている。<sup>(16)</sup>これら各種の役割は、同年にヴァリニャーノが作成した一連の日本の規則に則った形でこのカタログに書かれたものと想像される。先にあげた『門番の規則』『茶の湯者の規則』等もこの日本の規則の中に含まれているものである。<sup>(17)</sup> そこで次に、この規則に沿って同宿の役割を見てゆくことにす

る。

まあ、聖堂係 *sacristão* と呼ばれている者は、聖器——長衣・ワイン・カンデラ等——の保管、教会の扉の開閉・鐘をならす事等がその仕事として示されており、教会の世話をするペーメンの命令に従いその職務を遂行したようである。<sup>(18)</sup>

次に、『食堂係の規則』 *Regras do Refetoreiro* では、食堂で使用する道具——手拭用タオル、箸等——の管理・食事数の確認などに食堂係があたるよう指示されている。<sup>(19)</sup>

また、『台所係の規則』 *Regras do Cozinheiro* という史料も残っている。この台所係が同宿の役割であったか否か不明ではあるが、食堂係・台所係などの仕事は、先程の食卓での奉仕の、より具体的な姿を示しているものとも考えられる。<sup>(20)</sup>

この他に、食器室係 *despenceiro* と云う者もあり、来客の世話をする者（イルヤン）の指揮下に食器貯蔵室にかかる食料や物資の保管を担当してゐたようである。<sup>(21)</sup>

日本の規則の中で最も長い規則である『服務規定』 *Obe-*

dientias

(以下、ガアリニャーノの『服務規定』) では、第一項——章が同宿に関する規定にあてられており、その第一項には次のように記されている。

「第一に住院でペーデン達と一緒にいる同宿は、主要な修院に行く時には食卓やその他同宿に共通の仕事や職務を手伝わねばならない。また、他のモッソや小者が行なうのと同様に、上長が彼に命ずる修院の奉仕を手伝う……。」<sup>(22)</sup>

このヴァリニャーノの『服務規定』は、フランシスコ・ペシオ Francisco Pasio によって補足・改正され、一六二一年に再編められているが、そのペシオによる新たな『服務規定』の第一章七項には、

「住院のペーデンやその他の者が田舎を巡回する時には、同宿がベッドを整えたり、寝室を掃除したりできるが、自分の住院や、その他全ての主要な修院や ロンジオ Col-legio に入る時には、余の習慣に応じて規則を守るようだ。また、週二回寝室を〔ペーデンが自分で〕掃除すれば、その他の日には同宿にそれを掃除せらる事は禁じない。また同じく、同宿達が蚊帳 Caya・紙帳 Xicho をつり、はず

すとかカシデラを持つて来たりするとか、その他同様な事をするのも禁ぜられない。これらの事は、小者をもつて行なうよりも、同宿をもつて行なつた方が都合が良い。<sup>(23)</sup>」と述べられている。

このように、同宿はかなり俗的な——日常生活上の——仕事も行なつていたと考えられる。この俗的な仕事に携わる同宿を含め、同宿全体を考えた場合に、ひとりの同宿が单一の役目のみを負つていたのか、あるいはいくつかの役目を兼務していたのか（同宿が少數の場合は当然ひとりで多くの役目を負つたに違いない）、その役目は恒常的なものであったのか、交代され得るものであったのか更には、各同宿の区分間での移動はどうであったのか等々多くの疑問が残るが、規則の上からは、これ以上明らかにする事ができない。もともと、茶の湯者等の特殊技能者はその役目に専念し、恒常にそれにあたつたと見ることは可能である。また、パシオの『服務規定』第八章には同宿についての規定が集められているが、その第二項は次のように記されている。

「それぞれの才能に応じて、我々の学問「ヨーロッパの學問」Letra や日本の學問、あるいは会の奉仕に役立たせ得るその他の事を〔同宿が〕学ぶように氣を配るように。」<sup>(24)</sup> というのは、この事は同時に、彼等が向上し、教会で満足して生活してゆくためのたすけになるからである。また「パードレは」管区長が、何年か奉仕して来た後にラテン語を学ぶ才能のある者を、セミナリョに収容してくれるよう努めするようだ。更に、このような「才能のある」者でなくとも、カテキスター「伝道師」や布教師として役立ち得る者には、日本の學問を修得するとともに、教理や要理あるいは仏法 Buppo などの學問を行なわせるようだ。布教師やイルマンになることのできない者は大きくなつて住院がいやすになつた時に、コレジオや主要な修院において何かより重要な職務につけることができる。<sup>(25)</sup> また、第五項には、「院長は住院の中ではある同宿が」布教師「の同宿」になる時には、同宿を、また、その為の理由があれば他の職務でパードレに奉仕する者を取替えることができる。

とあり、種々の同宿間に移動のあつた事が認め得るようである。

以上のような同宿の役割の広範、多様さは同宿 자체の発生及び発展・編成の経緯から説明し得るかも知れない。といふのは、現在のところ十分な史料を挙げて論ずることはできないが、同宿という日本語の名称が一般に用いられる以前（多分一五五〇年代～七〇年代）の布教活動においては、奉仕の為に教会へ捧げられたという子供達が修道士の身のまわりの世話から、布教活動そのものまで援助していくと考えられ、そこに同宿の一つの起源を見ることができると考えられるからである。<sup>(26)</sup> それらの者が、布教団の第一次整備期とでも呼ぶべきヴァリニャーノの第一次日本巡察時（一五七九～八二年）に同宿という呼称で一般に呼ばれるようになり、布教団の拡大とセミナリヨなどの教育設備の設置・運営とともに次第に機能的に整備されてゆき、遅くとも一五九二年迄には、同宿という名のもとに効率的な細分化をともなった形での再編成が行なわれ、より機能的に同宿を利用してゆく為の諸制度が確立されていったもの

と考えられる。<sup>(27)</sup> 既出のパシオの『服務規定』第八章三項には次のように述べられている。

「同宿の中にも差異があるべきである。というのは、管区長の判断で、布教師である者や古参の者、あるいは尊敬されている者達は他の者とは離れて食事すべきであるからである。また、彼等に対しては、教会において満足して生活し、根気よくやってゆけるような他の同様な特権を与えるべきである。特に、満足して長い間その職に就いている成人した布教師達については大いに考慮さるべきである。彼等は黒い服が着られるように。そして彼等がキリスト教徒から信頼されるよう努めるよう。」

また、先に引用した二項の最後の部分にも、「布教師やイルマンになることのできない者は、大きくなつて住院がいやになつた時に、コレジオや主要な修院において何かより重要な職務につけることができる。」<sup>(28)</sup> とあり、これらの同宿内の区分を、イエズス会側は単に機能的な同宿の利用という観点からばかりでなく、階級に近い区分間の昇進とい

つたやり方で同宿を統治してゆくという観点からも、利用していた様子が窺える。<sup>(29)</sup>

#### 四

ポルトガル語ではモッソ moço, 奉仕人 gente de servico, 日本語では小者 comono 等と呼ばれた日本人達が第二の区分であるが、この者達に関する研究はこれまでほとんど為されて来なかつた。しかし、キリストン教会は、先の同宿の一部とともに、以下に述べるモッソにその日常生活の維持において、ほぼ全面的に依存していたのである。

一五七五年一二月六日付インドの第一回総協議会議事録を見ると、「コレジオや住院で我々「イエズス会士」は、モッソや奴隸 esclavos なしでやつてゆけるであろうか」という諮詢が二〇番めに提出され、それに対し以下のような答申が為されている。

「全員が、いかなる場合でも我々はモッソや奴隸なしでは次の理由によつて維持してゆけないであろうと一致し

キリストン教会内の非会員日本人 I

た。第一に、教会では食糧を買いに行き、料理の仕事やその他の家事をする為に彼等が必要である。また、コレジオでは、耕地・料理・衣服の洗濯・水汲み・粉ひき・かまど・航海やその他の家事など、イルマンでは少数で力が弱いために決してすることのできない事のために彼等が必要である。土地はやせていて、暑さは厳しく、そのため多くの仕事はできないのである。第二に、経験によれば、過度に働く者は後に病気になつてしまふからである。第三に、土地の人々の間ではこの種の仕事は大変卑しく、下等なものだと見做されているので、インドではどんなポルトガル人もそれをしない。またたとえ従事したとしても、土地の人々やポルトガル人達から、大変良くないことと考えられてしまう。そして、彼等「モッソ」が満足して修院の仕事に従事している時に、ほとんど何もすることはできない。また、同様に奴隸も必要である。第一に、当地のモッソは大きくなると結婚し、コレジオからいなくなつてしまふ。また、仕事がより持続し、好む時に仕事から去る自由を持つていかない奴隸達のような力をモッソは持つていない。第

一に、他の修道会、跣足派でさえもが奴隸やモツソを同じ様に仕えさせているのである。第三に、インド全土には、これらの奴隸がたくさんいるので、たとえ貧しい者や下層の者であっても、仕えさせる奴隸を持っているのである。

第四に、奴隸の使用する着物は安く、米で維持できるから、彼等の維持は安価ですむ。

しかし、それでもなお、彼等が貧窮しているか、正当な奴隸であるかどうかを確かめる事に、十分慎重であるよう。また、そうでない「正当な奴隸でない」事が明らかなるには、自由の証明書が与えられ、その奉仕の代価が支払われるよう。また、奉仕を行なつて来た奴隸には、何年間「の奉仕年限」かを査定して、生活の途を持てるよう援助するよう。更に、今まで以上に十分なドクトリナを彼等に施すよう気を配るよう。そして「彼等は」良く扱われ、祭日には慰安のための時間を与えるよう。これらの奴隸の正当な理由を調査するために管区長によつて、「<sup>(30)</sup>三名のペードレが選出されるように。」

この協議会に引き続き、インド管区会議が開催され、協議会の答申に基き同様な事項が討論されている。そして、この管区会議の決定事項は全てローマの本部に送られたのである。それを受け取つた当時のイエズス会総会長エベラルド・メルキヨリアン Everard Mercurian は、各条毎に自己の見解を加え、総会長の指令としてインドに書翰を送つてゐる。<sup>(31)</sup> この総会長の指令は無論のこと、先程の協議会、管区会議での決定事項は共に、当時インド管区内の「地方区」であった日本においても当然効用を持つた筈である。事実、『総会長によつて、日本の修院や住院で守られるためにインド管区に属する諸事の摘要四章及び六章より抜萃された服務規定』と題する史料に、先の総会長の指令が引用されているのを見ることができる。その第二二項には、以下のように記されている。

「我々の修院においては、必要性があり、かつ全ての者に對して必要な正当性が守られるために、その捕われの理由が十分に知られるような非常に細心の注意が払われる限りにおいて、捕われの者 captivos や、その他のモツソを利用することができよう。彼等は、ドクトリナや、我々の修

院で行なわれるのに都合の良い良き習慣の中で教育される  
よう。」<sup>(32)</sup>

また、一五七六年四月付でヴァリニャーノがインド管区の各上長にあてた協議会の決定事項通知書の六項にも、同趣旨の記述が認められるが、この通知書もまた、当然日本布教長カブラルの許に届けられたものと考えられる。<sup>(33)</sup>

日本国内において、表立った問題としてこのモッソに関する事項が取上げられるようになるのは、日本の第一回総

協議会諮問一八や『助言と忠告』等において、パードレの外出時に同行する同宿やモッソについて言及されている事に対し、日本の何人かのパードレやローマのイエズス会本部において修道会士としての清貧理念に反する華美な行為に陥りはしまいかという疑問と批判が持たれるようになつてからのことである。この問題は第二回総協議会（一五九〇年）諮問五として詳細に討論されたのであるが、結局、華美の原因となる可能性は認めながらも、現在のところ日本にそのような華美は存在していないし、修院にはモッソがどうしても必要であるから、適当な制限を行なうこと

で、華美的発生を防ぎ、同時に修院の仕事もうまく遂行できるであろうといった趣旨の答申が出されたのである。<sup>(34)</sup> この答申を受けて、ヴァリニャーノは長文の裁決を認め、モッソの使用は不可避であるとの前提のもとに、同伴者としての同宿、モッソ及び修院におくべき者の人数について制限を設けたのである。その制限とは具体的には次の様なものであった。

住院におく人数について言えば、まずイエズス会士の駐在する建物を主要な修院と小さな住院とに別け、前者に対しては修院に固有の者で常にそこに居なければならない者として、三、四人の同宿、二人の剃髪者、一人の殿原をあげたあとで、モッソについて、

「これらの他に、台所や衣服の洗濯・荷物運び、その他修院の下々の仕事の為に奉仕のモッソ moços de serviço が必要である。彼等は、前述の修院がある土地や人々に応じて必要性が大きかつたり小さかつたりするので適当に制限することができない。」という制限のしかたをしている。<sup>(35)</sup>

この主要な修院のモッソに関し、以後も具体的な数字をあ

げた制限は行なわれなかつたようである。<sup>(36)</sup> 一方、小さな住院院に對しては、地区長の規制のもとに奉仕のモツソを持つことが許されている。<sup>(37)</sup> 一五九二年のヴァリニャーノの『服務規定』では茶の湯者と剃髪者を含めて八人（従つて、ここで言つところのモツソだけでは五人）と明確に制限されていて。一六一二年のパシオの『服務規定』においても「五人以下」とされており、小さな住院に関する限り、規則上は五人ないしそれ以下という制限が、少なくとも一五九二<sup>(38)</sup> 一六一二年の間は存在したことはほぼ疑いない。この制限が現実にどの程度の効力を持ち、遵守されていたのかを知るのはかなり困難であるが、一六〇九年一月一二日付でジョアン・コエリョ João Coelho が作成した『日本イエズス会の修院・人員・定収入・出費等の数についての小報告』を利用して、一つの具体例を見てみることにする。それによれば、モツソの数が多いものとしては長崎のコムジオ一二〇人、有馬のコレジオ四〇人、同セミナリヨ三〇人等である。また、住院として記されているものについては、五人とあるのが大部分で、制限の一応の効力を認める

ことができる。しかし、中には秋月の住院一二人、島原八人、天草の志岐、堺、金沢に各六人といったように規制を超えている例もいくつか見うけられる。更に修院について見てみると、八～二五人と實に様々で、その土地柄に応じてじ適宜定められていた様子が窺えるようである。（表 I 参照）

次に、同伴であるモツソの数について見ると、まず最高の上長 Superior supremo (Viceprovincial) は荷物を運び、食事を作り、衣服を洗濯し、馬の世話をする等、下々の世話をさせるためにモツソを同伴であるが、その人数についての規制は格別行なわれてはいない。三人の地区長 tres superiores universales (del Shimo, Bungo e Miyaco) は準總区長 Viceprovincial の決定に応じた奉仕のモツソを同伴でねむむねでいる。また、修院の院長 reitor は、他の一般のペーデン達と同じ扱いで食事・洗濯・馬の世話等のために一人のモツソを同伴する事がであると定められている。更に、イルマンも一人一人のモツソを同伴することが可能であったが、これは、ペーデンなしで行動する際に、上長が必要に応じてモツソを与えるという形

表I 布教団構成の一例 1609年〈コエリヨの小報告により作成〉

場所	パードレ	イルマン	同宿 Colleqians	奉仕の モッソ
Nagasaqui Collegio	15	12	60	120
Casa de Noviciado ospital	2	23	3	15
Uracami residencia	1	1	4	necessaria
	1		3	5
Arima Collegio	11	3	15	40
Saminario	1	4	90以上	30
Cazzuça Cuchinotçu residencia	2	1	5	8
Ariye residencia	1	1	3	5
Ximabara residencia	1	1	5	8
Saigo residencia	1	1	3	5
Ilhas de Amacussa				
Xiqui residencia	1		3	6
Saxinotçu residencia	1	1	3	5
Cozzura residencia	1	1	3	5
Vomura Tonê residencia	1	1	3	5
Fizem junto à fortaleza casa				
Isafaye residencia	1		4	5
Fundoyama residencia	1	1	3	5
Yagami residencia	1		3	5
Fucafuri residencia	1		3	5
Chicugo Yanagava casa	1	1	4	10
Chicujem Facata casa	2	2	14	18
Aquizzuqui residencia	1	1	5	12
Bujem Cocura casa	2	3	8	25
Bungo casa	2	1	6	12
Firoxima casa	2	1	7	15

場所		パードレ	イルマン	同宿 Collequians	奉仕 モソッ
Miaco	casa			18	20
Baixo	casa	3	9	3	5
miaco de Sima	residencia	1	1	7	8
Vozaca	casa	1	1	5	8
Fuxim	casa	1	1	4	6
Sacai	residencia		1	4	6
Fococo			1		
Kanazawa					6
計		63	74	301	422

をとつて行なわれたもののようにある。<sup>(40)</sup>

以上のように、

同宿の場合と同様に、モソッソにも修院に固有の者と、各パードレの外出巡回時に、彼に同行するように定められていた二名の者とが存在していると考えられる。

やがて、この種のモソッソ（特にパードレの外出巡回用に定められていたモソッソや同宿）は

外出時はともかくも、修院に戻ってからもあたかもそのパードレ固有の私的奉仕人のごとく扱われるといった習慣を齎らしたようである。一五八六年一二月一〇日付コチン発のヴァリニャーノ書翰は、先の『助言と忠告』に対しても示された疑問と批判への弁明を為すべく総会長に書き送られたものであるが、その中で彼はこの事に詳しく触れ、前任の日本布教長カブラルが「セミナリョや修院の中においても、同宿やモソッソが自己個人の奉仕人であると明言したがる人々がおり…」とローマに書き送った事に対し、自分は、現日本準管区長ガスバル・コモリョ Gaspar Coelho と豊後の地区長ペドロ・ゴメス Pedro Gomez にあてて「〔特定の〕同宿やモソッソが、外出のためにパードレに対し決められていることに不都合があるならば、それをとり除くように。」指示したとして、弁明につとめている。<sup>(41)</sup>一五九〇年に開催された前述の第二回総協議会でもこの事が議題の一つとしてとりあげられている。そこにおいても結局、現在それを改正するのは不都合であるとして、従来からの方針が追認されている。<sup>(42)</sup>

このような事情を反映して、パードレに同伴するために決められている特定の者であつても、修院では他の者と同様に、院長の命令に従い修院共通の仕事に従事するように

といつた趣旨の規定が何度も出されている。例えば、『助言と忠告』の改正文一八八項には次のように記されている。

「パードレ達は次のような方法で派遣されるように。即ち、キリスト教界のある部分を担当する各パードレは、告

解・埋葬やミサを立てたり、その他の職務に相応しい仕事をするため、田舎 inaca を巡回に行く時にイルマン一人と、ミサを援助し、祭壇やその他必要なものを整えるために、同宿一人を連れてゆくように。上長は、この同宿を村における必要度に応じて、一人または二人のモツソと共にパードレに付与するように。モツソは修院にいる時は、一般に上長の命じた仕事に就くように。<sup>(43)</sup>

一六一二年のパシオの『服務規定』三章三項では、「住院においては、一八才以下の幼ないモツソは持たれないよう。しかし、大きな修院で、共通に奉仕するためであつて、ある〔特定の〕パードレやイルマンに奉仕する

ためでなければ、そういう「一八才以下の」者でもいることがある。」

更に続けて四項では、

「一般的修院にいるパードレは一人以上のモツソを持たないように。また田舎に行く為にもっと多くの者が必要であつても、管区長の許可なしに、それを認めてはならない。」

また、五項では

「いかなるイルマンも、管区長の許可なく固有のモツソを持たないよう。」

といつたように規定されている。<sup>(44)</sup>これらの規定を見る限りでは、パードレに対する個人的奉仕人としての性格を持つたモツソが、廃止もしくは減少の方向にむかっていったとは考えられない。むしろ逆に、容認されてゆくようになつていつたと考へることができそうである。しかも（管区長の許可が必要であったにしろ）イルマンにまで広がつていつたようである。

パシオは更に続いて六項に、

「ペーダンのモッソも、イルマンのモッソも Assim os Moços dos P.ea como os [moços] dos Irmãos 彼等が奉仕しているペーダンやイルマンが、彼等を必要としない時には、上長の判断でそれぞれの性向に応じて修院において他の修院のモッソとともに奉仕するように。<sup>(45)</sup>」と規定しており、ペーダンのモッソ、イルマンのモッソといった表現まで使用している。また、ペーダンやイルマンが彼等を必要としない時にはじめて修院の仕事に就くといった規定の内容から、これらのモッソの私的奉仕人としての性格は一層濃厚になつていつたものとも推定し得るようである。

このような傾向に対しても、会の内部からも批判が生じている。一六一八年九月三〇日付の書翰で、フランシスコ・ピエイラ Francisco Vieira は、前述の一連の規定を作成したパシオに對し、「多くの従僕を従えて、自分の世話をさせたり、通常自分の私室で食事をするなど、いたつて無頓着に会以外の私事のために上長の経費を増大させる等の所行を最も働いた人物である。」と批判し、「日本の最高の上長達は多種の従僕を従えて、奉仕や扈從をさせたり」し

ていると非難している。<sup>(46)</sup> ピエイラはこの書翰でイエズス会上層部に対する批判を展開しており、確かにモッソの人数等につき明確な制限のなかつた上長達の中に、このような傾向が強かつたとも言えるのであるが、これは単に上長達だけに限つたものではなかつたのではないかと思われる。とまれ、この種のモッソの存在は、修道士としての清貧理念の上からも、また教会の経費といった面からも、数々の問題と批判とを生ぜしめていたと言つてよい。

経費について、パシオの『服務規定』九章、「会員や同宿の衣服について」の七項では次のように述べられている。

「同宿は、小者のように俸給 estipendio によつて奉仕している。」<sup>(47)</sup> の七項では次のように述べられている。ビエイラ Francisco Vieira は、前述の一連の規定を作成したパシオに對し、「多くの従僕を従えて、自分の世話をさせたり、通常自分の私室で食事をするなど、いたつて無頓着に会以外の私事のために上長の経費を増大させる等の所行を最も働いた人物である。」と批判し、「日本の最高の上長達は多種の従僕を従えて、奉仕や扈從をさせたり」し

着せ給金払いと解釈しておく。)

モツソは、結婚すれば原則として解雇されたが、特別の技能者は住院の外に家を持ち、通いで教会に奉仕することも可能であったようである。<sup>(48)</sup> その他の単身のモツソは、皆修院内で生活し、年令によつて区分された場所で寝起きしていた。<sup>(49)</sup>

以上述べてきたように、モツソは原則として、いわば仕着せ給金払いの単身の奉公人といつた性格を持つており、教会全体にとっても、またパードレ各個人にとっても、日常生活全般にわたつて必要不可欠の存在であつた。しかし、それがために一方では、私的奉仕人としての性格が容認されてしまい、修道士としての清貧理念の面からも、また教会財政といった経済的な面からも、多くの非難を招いていた。<sup>(50)</sup>

最後に、これらのモツソは帶刀していたようで、この点に対しても批判が為されている。

「パードレ・パンソは、同宿および殿原と呼ばれるいろいろな従者を伴つて長崎を歩いた。彼等は、我々の間の召

使い小姓・楯持に相当する。というのは、刀と脇差を身につけているからである。ポルトガル人達が当地「マカオ」に来て、長崎においてイエズス会パードレが帶刀した日本人を従えて歩いていたことや、その他これに類した振舞について残念そうに語り、我々は非常に恥しい思いをした。<sup>(51)</sup>

## 五

既述の論文中でロペス・ガイ師は看坊にも言及し、その性格をインド布教におけるカナカピレイとの類比をもつて論じている。確かに日本の看坊はカナカピレイと類似した性格を持つていると言えるが、その起源は、むしろ單なる教会の建物の留守番役にあると考えた方が妥当であると思われる。フロイス Luis Frois は一五六一年にガスパル・ビレラ Gaspar Virera が都から堺へ布教にむかつたことに触れて、「パードレ〔ビレラ〕は、二、三人のキリスト教徒をみやこの教会の番人、且つ世話人として後に残して、その年八月堺へたつた。」と記している。<sup>(52)</sup> また、一五六三年四月二七日付堺発のビレラ書翰には、彼が再度堺へ行つたこ

とについて記しており、

都のキリストン等に教会を托し、一人の老いたるキリストンを番人 *guarda* として留め、堺へむかって出発した。<sup>(53)</sup> と述べられている。このような者が次第に、パードレの常駐しない教会の諸事及びキリスト教徒の維持・管理を行なうようになつたと考えられるのである。

ところで、同宿の場合と異なり、看坊という日本語はあまり一般的には用いられなかつたようで、むしろ、ポルトガル語による説明的な表現——教会の世話をする者 *lo que tem cuidado da igreja*・教会の責任をもつ坊主 *Bonzo quem conta da igreja* 等——が史料には多く見出せる。

私の見たごく僅かな史料の中では、一六〇三年一月六日付のデイオゴ・メスキータ *Diogo Mesquita* 等が作成した証明書が、看坊 *Cambo* と云う日本語の使用例の嚆矢で、そこには次のように記されている。

「これらの学生や同宿の他に、他の剃髪者がいる。当地では、それは看坊 *Cambo* と呼ばれる村にある教会の世話をし、祭壇を整え、教会を清潔にし、村々の子供やその他

の人々にドクトリナを教え、病人を訪問し、告解をさせるためにパードレを呼びにやつたりする。そして、彼等「村人」に、その村々が陥つてゐる肉体的精神的無節制と窮状を知らしめる。それは、パードレができるだけ彼等を救済するためである。(中略) 余は、全ての看坊に対してもぞれの身分「品性」 *calidades* に応じて正当な給金 *soldada* を与えている。彼等は日祭日に教会に村人が集まり、彼等に宣教によつて援助を与える事のできるパードレやイルマン、あるいは同宿が見つけられない時には靈的な本を何冊か読んでやる習慣である。<sup>(54)</sup>

この史料を含めて、私の調べた限りでは看坊という日本語が使用されている史料は全て一七世紀にはいつてからのものであつた。<sup>(55)</sup> 一方、前述のポルトガル語による説明的な表現は、かなり早い時期から見られ、一五六六年九月一五日付、イルマン・フェルナンデス *Fernandez* の書翰を嚆矢に、目についただけでも一〇通をこえてゐる。一七世紀にはいつてからのも四通程あつた。<sup>(56)</sup> これだけの史料からでは正確なところはつかめないが、看坊という日本語は

同宿という日本語程頻繁に利用されなかつたか、あるいは仮に一般化したとしても、その時期はかなり下るものと考えられる。<sup>(57)</sup>

一五九二年のヴァリニヤーノの『服務規定』と一六一二年のパシオの『服務規定』を比較するとその間の変化を窺うことができる。ヴァリニヤーノの一三章九項には、

「また、教会の世話をしている者のうち、村々のために印刷されたドクトリナを村人達に読み聞かせる何人かの坊主がいるよう努められるように、また、このドクトリナを教えている何人かの盲人もいるように。そして、以後当分の間は、ある時は祈りの、またある時は問答のドクトリナが「どうぞ」と印刷されたドクトリナ以外は教えられないよう努めるように。」

一方パシオの一〇章八項には、

「教会には読みのできる看坊がいるように。彼等は教会

の世話をし、オラショ〔祈り〕を教え、住民に印刷されたドクトリナ・キリスト教やその他の靈的な本を読むように。またドクトリナ・キリスト教を教えている貧しき良き

キリスト教徒もいるように。更に、当分は印刷されているもの以外は教えられないように。」<sup>(58)</sup>とあり、「教会の世話をしている者〔坊主〕」から、「看坊」へと呼称の変化を見ることが可能である。

パシオは、その看坊の維持費について次のように記している。

「全てがその地のキリスト教徒のために行われているのだから、土地のキリスト教徒が看坊を維持するように努めるように。」<sup>(59)</sup>実は、この方針は既に、一五八〇年代には立てられていたものである。

しかし、これに関して、『一六一四年から一六一七年の現在に至る迄の間に、日本において、この最近の迫害の全期間を通じて当地のキリスト教界の維持と教化のために働いた人々の数と、彼等が訪れた土地の数に関する小報告』と題する史料には、

「そして、今でさえその布施と俸給を与えて「イエズス会は」彼等「看坊」全員を援助している。」<sup>(60)</sup>と書かれており、イエズス会が維然として看坊に対し財政援助をせねば

ならなかつた状況が示されている。

と思ふ。)

看坊はカタログの中では常にモッソと同列に（多くは一緒にして）記されており、人数もまたモッソとの合計で示されている。そのため、看坊だけ（モッソだけ）の人数はかなりつかみ難いと言える。他の史料でも、その人数を具体的に示しているものは極めて少なく、現在まで三通しか見あたらなかつた。即ち、一六〇三年一月一二日付日本司教ルイスセルケイラ Luis Cerqueira の書翰に一七〇人

一六〇四年一月頃のパシオ書翰に一六〇人、一六〇三年一〇月八日付マカオ発ヴァリニャーノ書翰に「一九〇人を超える教会の世話をする者……」<sup>(61)</sup>とある三通の史料である。  
しかし、これらの数字は、ペールやイルマンが常駐してはいないが、ある程度維持すべきキリスト教徒を持つ教会の数と密接な関係があり、その点軽視できない意味を持つ<sup>(62)</sup>といふとも言ひ得よう。

これまで述べてきた、同宿・モッソ・看坊という三区分では捉えきれないものとして、殿原 tonobara があげられる。『来客の世話をする者の規則』一〇項に、「また、院長に関しては来客に対する諸事や奉仕をうまくとりしめることのできる一人の殿原を修院で常に持つよう努めるように」と書かれている。<sup>(63)</sup>等二回總協議会諮詢五に対する裁決には、

「来客のために着 sacanas やその他の料理をつくることがだま、座敷 zaxiquis で来客の接待をし、その身分に相応しい雑用をするために諸方へ使いに出る事のできる殿原を一名おかねばならない。」

とあり、殿原は前述の茶の湯者や門番に近い性格のものであつたと推定できる。<sup>(64)</sup>

（更に、看坊を一向宗における講・道場の組織と対比することも可能であろうが、今のところ十分な史料が見つけられないでいる。この点多くの御教示と御批判を願いたい

パシオの『服務規定』八章七項には、「同宿や殿原や小者は、管区長が他の方法で扱われる方

が良いと考える同宿や剃髪者以外は、食事や衣服について彼等の階級に応じ、これについて定められている指令に従つて、全ての地方で同じように扱われるようだ。」

と規定されている。<sup>(65)</sup>

しかし、カタログではこれらの殿原についてほとんど言及されておらず、その人数に至つては全く記載がない。また、諸規則にも殿原という語 자체はあらわれるが、その職掌や教会での位置などについての具体的な規定は皆無といつて良い程である。このため、これ以上殿原について論ずることができない。ただ教会は、殿原を交際や交渉の諸事を「うまくとりしきることのできる」者として利用し「その身分に相応しい雑用をする」者であると考えていたようであり、このことは、(単にキリスト教教会における殿原ばかりでなく) 殿原といつもの一般的な性格を考える上で看過し得ない点ではないかと思われる。

## 七

ここで、同宿やモッソを統轄していたと考えられる役人

yacunin という者について述べておく必要があろう。再三引用して来た、ヴァリニャーノの日本規則の一つに『役人の規則』と題されたものがある。その二項めには、「その主要な仕事は、台所・食堂・食品室にかかる諸事がうまく整えられること、パードレ・イルマン・同宿・モッソがその時間に食事できるように適当な時間に「食事が」準備されること、それぞれの事に対しその時間に鐘をならさせること、である。」とあり三項めには、

「会員のいかなる者に対しても優位に立つてはならないことができない。ただ教会は、殿原を交際や交渉の諸事が、同宿やモッソに関しては別である。彼等については、全員が大きな者と幼ない者とに別れて、適当な場所で寝るよう、そして、時間を無駄にしないで、全員が自分の仕事を就くよう気を配るように。また適当な時にモッソを罰することができるが特別な罰 castigo extraordinario を彼等に課す必要のある時には、上長に報告せずにそれを行なってはならない。同宿を罰する必要のある時には、同上長の命令に従つてそれを行なうように。」と記されている。更に四項めには、

「修院の職人が彼〔役人〕に服従し、規則を持ち、それを読んで守るよう気をつけるように。また、だれか職人が派遣されたり欠けたりした時には、上長に適切なことを申告するように。また新しく〔修院に〕はいって来る者が、職務について教育されるように気を配るように。」と述べられている。この他に諸物品の購入・支出についての諸注意や、買入れ係 *comprador* に銀を与える種々の品物を買いにやらせる等々の仕事が役人の職務として記されている。<sup>(66)</sup> こうのように役人は、修院内の俗務の統轄者といった性格を持つており、多くの同宿やモツソンは彼の指揮監督下にあつたと考えることができる。

カタログにおける役人という語の使用例は一六〇六年の小カタログに、イルマン・アンブロービオ・フェルナンデス、イルマン・ロマンがそれぞれ長崎・有馬において役人と記されている一例だけである。<sup>(67)</sup> しかし、事実上前述の規則にあつたような職務を荷つた者は、一六〇六年以前も以後も、ポルトガル語による説明的な表現をもつて示された場合が多くかったようである。例えば「修院の世話をする」

「食堂・食品室の世話をする」「その他の修院の仕事を担当する」とかいつたように記されている者も（規則にある役人としての任務を全て担当していない場合もあつたであろうが）一応、役人と見る事ができるであろう。<sup>(68)</sup>

既に述べたように、大部分の同宿やモツソンはこの役人の管轄下にあつたわけであるが、役人の他にも、「来客の世話をする者」は「住院の他の奉仕に従つている者でない何人かの十分なモツソン」を持っていたし、財務担当のプロクラドール *procurador* も「輸送や荷造り、荷解きを援助したり、その他プロクラドールの他の職務を行なうのに必要で十分なモツソンを持つ」ことが可能であったようである。<sup>(69)</sup>

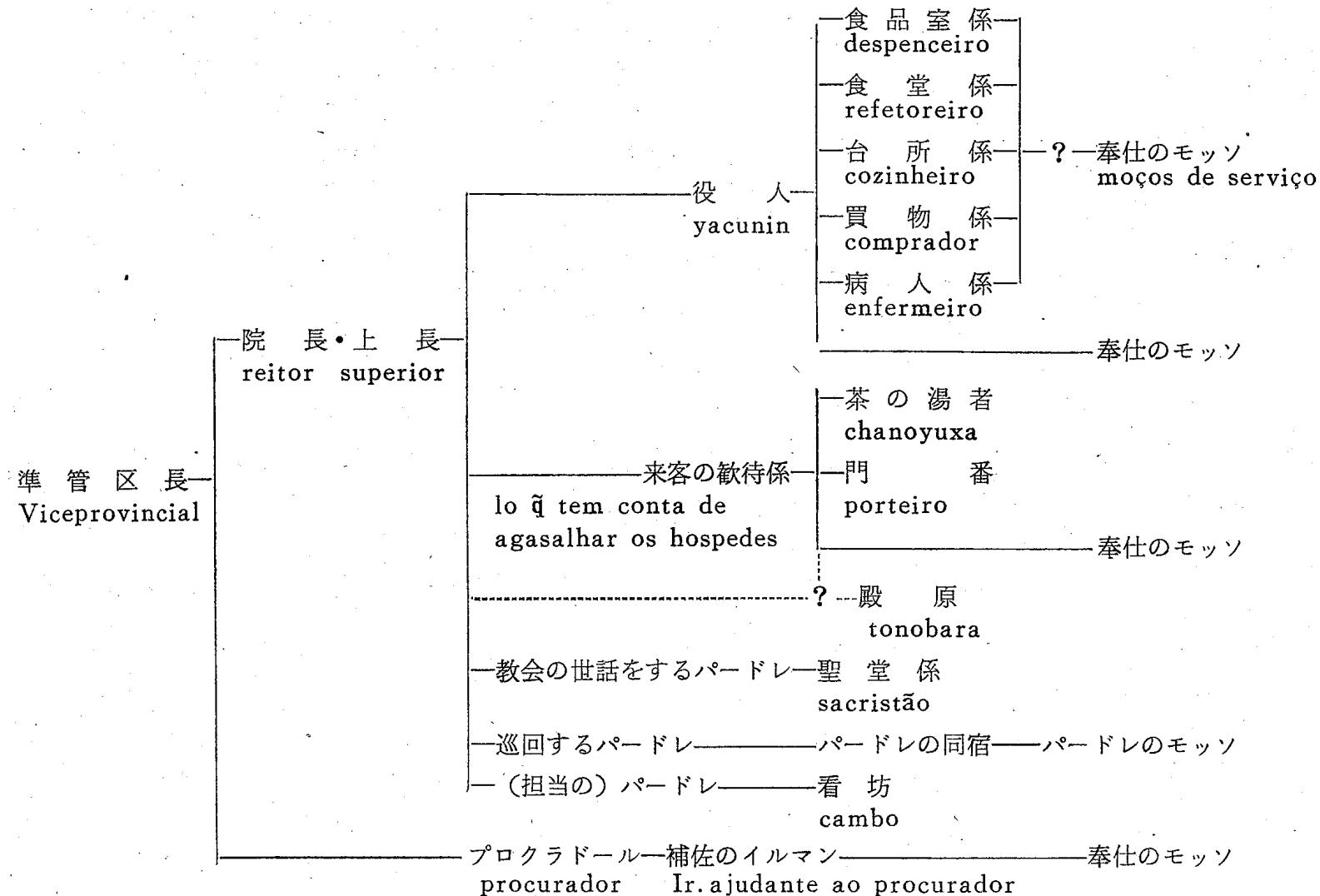
更に、三、四章で述べたように、各パードレも固有の同宿やモツソンを持つようになつていったわけであるが、それらの同宿やモツソンがどのような形で役人と各パードレの管轄下にあつたかについては残念ながら明らかにできなかつた。その点では、「来客の世話をする者」やプロクラドールのモツソンについても同様である。

最後に、不十分ながらこれまで述べて来た区分・役割・

表II <非会員の区分>

修院・住院 casa residencia	コレジオ・セミナリヨ collegio seminario	修院の外 fora da casa	教會(田舎) igreja inaca	同宿 dojucu	布教師の同宿 dojucu pregador (一般の) 奉仕の同宿? dojucu de serviço	セミナリヨの同宿 dojucu de seminario	既婚者のモッソ モッサ(洗濯のための女性) moça	看坊・教会の世話をする者 cambo lo q tem cuidado da igreja
				殿原 tonobara	モッソ moço de serviço	(一般の) モッソ 描われの身 captivos	(パードレ(イルマン)のモッソ 修院のモッソ moço de P <sup>e</sup> . (I <sup>r</sup> ) moço da casa	

表III <俗事及び看坊の指揮系統>



指揮系統をおおまかに示して表II、且も少し示しておく  
ことにす。これは、あくまでも規則をもとにして作成し  
たモデルであつて、現実を正確に示してはむとばむと難  
い。また、全ての修院（住院は無論のこと）にこれらの組  
織及び人員が揃つてゐたと考へるにもまだ当然であるな  
い。この二つの表は、このよつた限界を持つものであるが  
従来、こうした視点からの研究が為されて來れなかつた現  
状では、僅かながらそれなりの意味があるように思われ  
る。以上、大変未熟ながら報告をして來たが、多くの方々  
の御批判を仰あたこと願つ。

### 註

- (1) 表II(六五頁) 参照、なおいだの各ケルート日本入以  
外の者も存在してゐたのは確実である。回宿といふこと、Josef  
Franz Schütte, S. J., Monumenta Historica Japoniae I  
pp. 264, 266
- 「ハシマリトコトニテ」 Evora Cartas I f. 42r, 村上直次郎『マ  
ハシマリトコトニテ』日本選書』七五頁
- J. L. Alvarez-Taladriz, Sumario de Japón p. 488 n. 54  
Monumenta Xaveriana ex autographis ex antiquiori-  
bus exemplis collecta I pp. 525, 575

(8) Lopés Guy S. J. 「キリスト教上の信士の信徒使徒職組織」

(『キリスト教研究』第111輯所収)

Joseph Wicki, S. J., Documenta Indica vol. XI p. 16,  
Regimento para os Padres que estão nas costas de  
Travancor e Pescaria, Dos meirinhos e canacapoles

(3) Evora II f. 7, 村上『母譜』上 154頁

たお回宿といふ日本語の史料における初出時期について断定的  
たる記述はないが、かなり早い時期に屬すると思われる  
のだが、一五八〇年六月一日日本『日本の上級のための規則』

Regimiento para Superior de Japon, Archivum Roma-  
num Societatis Jesu. Roma. Jap-Sin 8 I ff. 256-62v, 264-7  
同年六月一八日『ヤマハラドウムニケテ』Regimiento  
que se ha de guardar en los Seminarios, Jap-Sin 22 ff.  
41-2, 43-4, 同年八月三日口へ連続カブラン輸輸 Jap-Sin 8  
I ff. 268-70 などがある。 (Jap-Sin 2 など)

Institutum Historicum Societatis Jesu の御厚意による  
マニエロトマヌマヌメ (Jap-Sin 8 I, 22 など)

題大字キリスト教文庫架蔵写真版本とも)

(4) Jap-Sin 2 ff. 26v-28, たゞ、これに先立つて長崎に予備金讃  
が開催され、一一番めに修院内の日本人イエズス会回宿をモル  
トガル人と回等に扱つぐやか否かが論議されており、カブラン  
を除く全員が回等に扱つぐことを原解を示してゐる。一五八〇  
年八月六日長崎発給金銀宛がトヨリヤーへ輸送 Jap-Sin 8 I

f.273v.

(12) Jap-Sin 2 ff.63v-64v (Alvarez, Sumario pp.194-5, n. 18)

(13) Advertimentos e Avisos acerca dos costumes e catangues de Jappão, J.F. Schütte, S.J., Il ceremoniale per i Missionari del Giappone pp.140-3 大日本禮記『正本ハハタテル』大八

(14) Schütte, Il ceremoniale p.240 (大日本禮記卷九九)

(15) resolución, Jap-Sin 2 f.80v., Alvarez, Sumario p. 194 n.18 大日本禮記 49 f.243v, Regimento pera os

Padres q estão nas residencias de Japão 「ハドニキシテ  
トトコヘリハトシ」 ハーナレサモトシハトシハトシハトシ  
ハトシハトシ。 (母畜) ハの母の回廻は、修院に食事の奉仕をな  
だら……」 がた、布教をつとめ回廻は、盐々ペーチンヒー總  
合會所の母畜を批へる事無くしてお給くムダヒセ。 (Jap  
Sin 49 大日本禮記 Institutum Historicum Societatis Jesu  
の總廻はハメタロヘマニハルカニ)

(16) Alvarez, Sumario Chap. XV p.188 大日本禮記 (12) の元  
照抄(英訳)

(17) J.L. Alvarez-Taladriz, Adiciones del Sumario de Japón pp.637-8 (『ナニシタ』) 本訳 捷大日本禮記 (14) ~ (15)  
JapSin 2 f.99v. Regras pera os dojucus

(18) 「總廻」ハ母畜を批へる事無くしてお給くムダヒセ。

(12) Schütte, Il ceremoniale pp.146-7 (大日本禮記卷九九)

「大日本禮記」大日本禮記の叢書にロスニアベ『日本教會史』上三三三田~

(13) Jap-Sin 2 f.108 「特別な挨拶が施さるが如きもあれば来客や  
訪問客の如き、心の細かな禮儀が施されねばならぬと来る如の禮  
式は勿論で、アーリヤ族の如きも「……」等々。 たゞ、 Reg-  
ulae Societatis Jesu, Romae 1948, pp.30-5

(14) Ibid f.106v., f.107.

(15) Ibid ff.101v-3v. Regras do que tem conta de agasalar  
hospedes 大日本禮記 101 | 大日本禮記 102 の口  
・母國の子供を口へさせ、 Ir. Sangui Gomez, porteiro e  
hospedes dos Japões-Jappão, 140 | 妻の日本子女を  
ログミセ、 Ir. Jorji, tem cuidado dos hóspedes, 141 |  
母の口の日本禮記の子供を口へさせ、 Ir. Leonardo Quimura  
Japão, tem cuidado dos hóspedes de fora, Ir., Paulo,  
Japão, tem cuidado dos hóspedes 妻が口へさせ、  
母の口の日本禮記の子供を口へさせ、 Ir. Paula  
Schütte, Monumenta I pp.443, 493, 553, 557) がた亞洲は、  
シテ日本を口へさせた際の禮節の施用は、もとより大日本禮記、 Jap-  
Sin 2 f.108 Regras pera o porreeiro (7) 「アーリヤ族の禮  
節の施用は、母の口へさせ、上級が彼に金銀などの贈り物を贈る  
事無く施用する事無く」

(16) Schütte, Monumenta I p.295 (285-325) Rol das casas

& Residencias que tem a Companhia na Viceprovincia de Japão neste mez de Novembro do anno 92, com os nomes dos Padres & Irmãos que nellas residem. (2) Rol dos doícos que estão nas casas de Japão com outra gente de serviço.

(2) 一五九〇年八月一日～一五九二年六月の間に開催された加津佐の第1回総協議会では、イニックスが十共通の規則 Reglas comunes (マニナスの本船で作成された金イニックスが十に於ける效力を有する規則、 Alvarez, Adiciones p.598 n.16, p.647 n.2) を日本の事情に合わせて改訂された書 (レギュラリヤーの『服務規定』第一章に具体化された書 (レギュラリヤーの『服務規定』第一章に具体化された書 (Jap-Sin 2 ff. 125-v.) である、「金員が一致した第1回は、該艦船による設立された全ての規則と命令 los Regimientos todos y ordenaciones を亘りペーペン達 [マヌロ・トメロ・リカ・ロクバ] ベロ・カルド・ベロハ・マヌロ・トメロ・リカ・ロクバ] の手によって前歴や経験や運営にて得た経験と生じた変化を反映する、より細かく命令われ得たために変更したり、検査したところねど」が詔問の答申として提出された。(Ibid. pp.597-8) これが改めたヴァリリヤーへは、その裁決で『助輔ルモウ』にてこの通り改訂し、改訂したローマ字書を改めてこれを決定してある。(Ibid. pp.647-8) 一五九一年一月一日～一五九二年六月の間に開催された第1回イニックス管区會議では、因應頂めばイニックスの事情に合わせて改訂された書 (レギュラリヤーの『マヌスのベニス』) 丸章の規則が金の規則へ轉化して改訂された。(Ibid. p.230, 同様の記述は) 『因章』の記述は Ibid. p.252 及び Jap-

支、艦隊の兵 (日本の艦隊や軍隊) にてて日本事情に精通し、かつての種の習慣についてももれもれた人々の手をわざと書き、先に作られた Compendium の再吟味を命じ、それが簡単な形で示す、神父達は該するものを茶の湯者 ch-anoyuxan 及び客の接待に認めるのかの区別して「ただそれだら」と改定してある。(Ibid. p.728 及び家入敏光『日本のカトリック』の邦訳参照) のように、従来の規則、特に『助輔ルモウ』の改訂するもど、その中で聖務と俗務が混ぜられてゐる。俗務にかかる規則が一五九一年の日本の規則中に独立して規則として数多く作成された背景の一端は、いつこゝた事情があつたのである。(Jap-Sin 12 I ff. 11v-12 参照)

なお、Reglas comunes のマヌス刷着やインスニオカルの改正等につきては、「一五八一年五月一日～一五八二年五月の總会長宛書翰」、「新ヘヘヌと书一五八〇年六月刷着つた」(レギュラリヤーの『服務規定』第一章に書かれていた) 船で、尊師の私くの何通かの翻訳の reglas de los revis-tas が載つて来た」とある。(Wicki, Documenta Indica Vol. XII, p.274) また、「一五八三年一月一日～一五八四年の開催された第1回イニックス管区會議では、因應頂めばイニックスの事情に合わせて改訂された書 (レギュラリヤーの『マヌスのベニス』) 丸章の規則が金の規則へ轉化して改訂された。(Ibid. vol. XIII, pp.351-2) 更にカトリックには『マヌスのベニス』) 丸章の規則が金の規則へ轉化して改訂された。(Ibid. p.252, 同様の記述は) 『因章』の記述は Ibid. p.252 及び Jap-

Sin 12 I ff.12-v)

(22) Jap-Sin 2 ff.109-v. Regras do Sacristão cf. Regulae pp. 62-9. ベハシカレ譲スルモノヲ tangedor オシマドガ (Wicki, Documenta Indica vol. XI, p. 29, Regimento para os Superiores que estam nas fortalezas 21.) 田長ニテ tangedor ベハシカレ譲スルモノヲ シルサカハ 聖職者ニテカ。 (Schutte, Monumenta I p. 554) 他だ、 田の聖の sacristão の職務は、 ベハシカレ canacapoles だ。 (Wicki, Documenta Indica vol. XI, p. 29.) 「sacristão 圣職者の主権スルモノニテ」 A p.<sup>r</sup> que tem cuidado da igreja は監視……]

(23) Jap-Sin 2 f.111v. cf. Regulae pp. 44-9

(24) Ibid. f.112. ベハシカレ食事を作れ業のものと耕作 聖職者ニテしたがひたがひたがひ、 聖職食事を作れのせめうへの役職 だねいためいだ、 その刃が田畠山川への職務上の責ひたがひ したがひたがひ cf. Regulae pp. 50-1

(25) Jap-Sin 2 f.110, Regras do despenceiro cf. Regulae pp. 48-9

益山の本ノ『聖人達の職務』 Regras d o enfermeiro f.110v おもね cf. Regulae pp. 34-7

(26) Ibid. ff. 125-147v. Obedientias do P<sup>r</sup> Alexandre Valig<sup>r</sup>o visitador tirados Das resoluções q pelle se derão assi sobre a pr.<sup>a</sup> consulta geral de Japão, q fez

no anno de 80 como sobre a 2.<sup>a</sup> q se fez no anno de 90 en Cazusa e sabre a 3.<sup>a</sup> q se fez en Nagasaqui no anno de 92 juntamente con a 1.<sup>a</sup> congregação q depois della se fez, das quaes cousas todas e das mais ordenações q p.<sup>r</sup> tinha deixado, depois de bem examinadas e revistas se tirarão as seguintes obediencias q to-dos os reitores hão de ter e fazer guardar exactamente en Japão—de dogicos cap. 11° f.133 (聖) 回縦務協議会議題 11月2日於神戸ノ議決參照) だね、 じるやうの日本規則にて Jap-Sin 11 I ff.173-4v, 11 II ff.286-7v. 『アヘンニ 田本のヨーロッパの統治の取扱い及ぼす影響の演説』 Memorial de las cosas que se piden a N.P. general por el visitador de la India y de japon ベハシカレ文書がおひ、 ノの規則は「日本ノ國ノ内政ノ事、 脱職又他の職務の職務 Reglas 又規則 Regimientos が〔一五〕九〇年に加津佐ド署理された〔第〕一回 総協議会及ぶ〔一五〕九一年の署名で署理された〔第〕二回 日本連合国総會議事会の議決に従ひ——ノヤシヒコトガ聖職者他の諸職は職務が送られ——定められた他の教會及び命令 avisos y ordens ベハシカレ文書がおひ、 おもね cf. Regulae pp. 34-7

(27) Ibid. ff. 125-147v. Obedientias do P<sup>r</sup> Alexandre Valig<sup>r</sup>o visitador tirados Das resoluções q pelle se derão assi sobre a pr.<sup>a</sup> consulta geral de Japão, q fez

(28) Biblioteca pública da Ajuda, Jesuitas na Asia 49-

IV-56 ff. 146-170v., Obediencias do P.<sup>e</sup> Alexandre Valigano Visitador da Província de Japão e China, revistas e concertadas pello P.<sup>e</sup> Francisco Passio Visitador da mesma Província para Instrucção dos Reytores, anno de 1612, Cap 1°, das Regras (『長崎のJesuitas na Asia』) 肘見日本書川里ノル。

(24)(25) Ibid, dos dogicos Cap 8° ff. 156-7v.

(26) Evora I f.67v. (『上『禮』下『下』～『風』』) ff. 83v-4 (p. 206),

Alvarez, Sumario Chap XV, (『田嶽』他語『日本通鑑』) 八九頁) 「仏僧の場合じゆ、我々の場合じゆ、剃髪してゐるやうに教會に入れた場合、両親が子供を教會に捧げた場合には、俗世から離れて生活」、離れば僧侶にならんことを表明

したがふが日本一般の風習である。」

(27) 拙稿「カトリック教会内の非命眞日本人、其教會組織の構成と問題及び教會と日本人の關係について」(『長崎』四九一) 及び参考。

(28) Ajuda 49-IV-56 f. 156v. など f. 158. cap 9° 「アムル同宿の衣服」六項など「禪の平處」に「アムル」

特權を持つて居する者以外は、同宿の組 avaxes 及布ナ nuncos は通常藍色)である。

(29) パハグンガシナハの正題 dogicos de congregação (Passio Obediencias cap 8°) パハグンガシナハの存在が 1 起の意味をもつてゐるやうであるが、具体的な史綱と似つかわ、現在これに深く觸れ得ない。

(30) Wicki, Documenta Indica Vol. X pp. 265-6 (Doc. 16)

表

Jap	Sin	IV	Ajuda
§1	欠	欠	§1 2
2	欠	欠	3(一部異)
3	欠	欠	4(一部異)
4	欠	欠	5(欠有)
5(欠有)			
6			6
7			7
8			8
9			9(一部異)
10			10
11			11
12(欠有)			12
13			13
14(欠有)			14
15(大欠有)			15
16			16
17			17(一部異)
18			18(大有欠)
19			19(一部異)
20			20
21			21
22			22
23			23
24(欠有)			24
25			25
26			26
27			27
3			28
4(欠有)			
5(欠有)			
	cap 6°		

(35) Ibid, pp. 228-9, 350.

pp.316-59. | 田中中世 | 史 | 田中一ノ類' Responsees

Reverendi Patris Nostri Generalis ad Congregationem  
Indiae Orientalis celebratam Goae mense Decembri  
anni Domini 1575.

(36) Jap-Sin 2 ff.120-4 (f.122v) Obedientias de Nosos  
P.tres Gerais de Roma tiradas do cap 4º e seis do  
Sumario das couas q pertencem aa Prov.a da India  
para se guardarem nas casas e residencias de Japão.  
正木輔達 Ajudia 49-IV-56 之の照抄。及方山の長崎を  
罷職が多べ、罪に犯されて居田やねせたひなこ。監定なが  
へい回相や出給つてねべ。(表三)

(33) Wicki, Documenta Indica Vol. X pp. 523-3 (Doc. 31

A) | 田中長年田中一ノト深かトニリヤーヘのヤハニ類の正  
岐庭輔輔「綱長せ」ノおど隠つて、ルの女ノ無ねだの取 capti-  
veryo の類の外記、類題、正田助た理田 el justo titulo も  
轄ヘルムのド船の車の帳簿を乍れ、修院の帳簿の別の原田  
の母と輔わるべし、俄々の修院ノラの奴隸の正田助の理田 los  
justos titulos de los esclavos や謂祖もいふふとね。也  
だ、正田助の理田をなす類、此に題題こして田中助の理田  
を稱シヘントせ、類凶岐のペーチノト開拓地をもつた。也だス  
ケーリナセ田中一ノト船の船の船の船の船の船の船の船の船の  
ぬとおもへ教導れどもめん。田中一ノト おおぬめん

脈を隔て、ルの左の脚を右の脚へ移へ移へ移へ移へ  
を命じらるべモハラ。

(34) Alvarez, Adiciones pp. 603-7. Quinta pregunta.  
(35) Ibid. pp. 653-8 Resolucion de los superiores y demas padres,.....

de sericio de los superiores y demas padres,.....

ルの一人の親類の一方は茶の湯の正皿の數をもたら「por-  
tero オモハニ船出番」他方だ、サルコトに来客の舟宿をもたら  
ルハラ。(Ibid. p. 655) 便び殿原だ、肴をつくる座敷や舟宿  
オモハニ船出番(大津修院)もた洗濯立つて、Valignano,  
Obedientias Cap.14, §6. 「今、同様に同修院もた洗濯 X(e)n)  
taqu ハタク、最ハ、華やかに catabiras も絶 avaxes 舟宿のみ  
の舟ペーチノトハナヘテ同宿の衣服を洗つたるの起ぬひねだ  
場所があぬもハナ。ルント、各人が好む度に田介の衣服を洗つ  
ルハニ舟宿もハナがだれぬもハナ、ルの仕事のために一人が1  
人のヤシハが決ぬふねて、ルモハナ。まだ外部にも修院の母と  
は旅ハニルのドかない着物 quimoes を洗つたら、ハハハハた  
ラキスルハナの舟宿を頃の女性を掛つもハナ」ハヌハ、特と  
ルの女遊ハニトせ、Jap-Sin 2 f.36v. Regimento que se  
ha de guardar nos Seminarios 之の船ペーチノトハラ。

(36) だだー、類題をばんの羅語だ、正田助の母と羅語の  
ムニ羅語をばんの羅語だ。 Alvarez, Adiciones pp. 607, 653-8,  
Valignano Obedientias cap(3)§ 2°, 5° Jap-Sin 2 f.127v,

Pasio Obediencias cap13° § 2° ajuda 49-IV-56 f.149v.

(註 (33) 総説)

(37) Alvarez, Adiciones p.656. 「それだ出張のためには、小  
な人一人の召喚と茶の湯の申詔をすむ一人の剃髪者、それ  
は同様に前述の地区駆逐によって規制された他の奉仕のや  
うへや大へんみながねだかへだむほどは難いんだ。」

(38) Valignano, Obedientias cap(3°) § 2° Jap Sin 2 f.  
127v. 「べんせんかくやドはな。 司馬御殿の援助をすむ一人  
の剃髪者、他の茶の湯の申詔をすむ剃髪者、やまと修院の他の奉仕  
のための五人のヤハヘレ、ペーネンと回伴する一人の召喚であ  
る。」 cap 7° § 2° f.130 「一人のペーネンと一人のマルタンが  
この修院からわざな住職のためには、心ひとびとて出でられたよ  
うに奉仕人は八人をひいてやドはなこのやねなかへ、その奉  
仕として毎年ハ○タハノおどが取れひたるもへど。」 Pasio,  
Obediencias cap 3° § 2° Ajuda 49-IV-56 f.149v. 「修院  
が持つぐやウハの人数ひとつでは、やねの差異や並格など  
のためどやドの修院が同1の人数であるわかなことかが、や  
の修院は御召喚と御膳をねねよつて、まだ一人のペーネンヒテ  
ヘドンが住んでこらへたわざな住院はひとつは、通院やハ  
ハ五人を超へぬぐやドはな。」

(39) Schutte, Monumenta I pp.515-39, Narração breve do  
número das casas, da gente, da renda, e gastos da  
companhia de Jappão, João Coelho, 1881, № 1 論の論  
文

キリシタス教會の崇拜日本人

がヨリヤハ・ハリハル「日本史籍集録一卷——」五五三冊から  
大正四年おどの日本カタログ及び関係文書といふト——」(ヰ  
リシタス文化研究会報) 第一八年 第1・1 [即九] —回所  
収) に載ふる所。

(40) Alvarez, Adiciones pp.656-8., Pasio Obediencias  
cap3° § 10° Ajuda 49-IV-56 f.150, 「1人のペーネンがハナカ  
くじへ盐せ、だいぶ黒せつねいをへじゆつめ、然へんか1人  
以上をひいてくじへじゆつめ、」 Valignano Obedientias  
cap(3°) § 2°, 4° Jap-Sin 2 f.127v., Pasio, Obediencias  
cap 3° § 1°, 2° Ajuda 49-IV-56 ff.149-v. など Jap-Sin  
49. f.246v. Regimento pera os Padres que estão nas resi-  
dencias de Japão, 「ペーネンがマナカに巡回して盐せ、や  
の〔一體不謹〕のために必謹なゆのを彼ハ〔本人〕からゆく  
つたら、ゆくわなかへたりかへ事じよよこて極めて懲重な小者  
commono や宋田やゆくへ」

(41) Alvarez, Sumario [Apendice] pp.250-70

(42) Alvarez, Adiciones pp.603, 653-8

(43) Schütte, Il Cermoniale (188) たゞ、この論文の作成  
時期はハトト、結局(1)而田つた日本のおのの地圖、Valignano  
Obedientias cap 14 § 10°, Jap-Sin 2 f.137 「やけた我々の修  
院やせ、ハボシハコト性欲をね、御膳屋もへて最終的に改組、  
検査された忠告に従へて日本の式儀の醜實を拂はねむ。」

(因〇九) 十三

傳の規則作成者どんの教主又は作成されたルルルルルルルルル。

(44) *Pasio Obediencias Cap 3° § 3°, 4°, 5° Ajuda 49-IV-56f. 149v.*

(45) *Ibid. ばね、Cap 1° § 10° に「個々の臣従」os dogicos proprios ひか、「ペーチン&ヘートンの小者」comonos de P.<sup>es</sup> & I.<sup>rs</sup> じかにいた表現がある。これが表現ばかりの規定に対応するかトリニヤーの cap 1° § 9° には見られない。*

(46) 高瀬弘一郎「キリストン布教とホルトガル人宣教師」(『日本ホルトガル協会々報』五 p.19-20)

(47) *Pasio Obediencias Cap 9° §7. Ajuda 49-IV-56 ff. 158-v.*

(48) *Ibid. Cap 3° § 11 Ajuda 49-IV-56 f. 150 「煙草、瓶々の修院では妻帶者の中へは奉仕されないものだ。もし真の捕われの身の者 verdaadeiros captivos である者が結婚を望みそれを拒否する理由がないときは、彼等について為されねばならない」として自分の院長と相談するようだ、まだもしご自由になる時には〔結婚する時には〕なにか特別の理由、*

ペソ製造人、仕立人、ナンバンの食事の上手な料理人等のようだ大変役に立つので上長が何人かどもして免除する以外は解雇するよへど。(C.R. Boxer, Christian Century in Japan p. 216, Alvarez, Adiciones p. 517, n. 11,) Schütte, II Cermoniale (24) pp. 140-3 「モソソ達は慣習通り、口だけは帶びておへよへど」 あたへハ ババ外の修道士の中へは使用つてこだ。León Pagés, Histoire de la Religion chretiene au Japon II. Anne-

使用者の家などを使意されざるこじめへ。

(49) *Pasio Obediencias Cap 3° § 3°, Ajuda 49-IV-56 f. 149v. 「院長はおらの小れば小者 (一ハオムーの者) が火のついたカノチーの火で、大きな者達とはなれて寝むり、またである限り彼等の世話をする者の監督下にあるようにところ命令を与えるよへど。」*

(50) 清貧理念からの批判としては先のヒュイラの書翰(註(4))

本文を、不必要的経費の増大といった面からの批判としては、一六一五年三月二五日付長崎発カルロ・スピノーラの書翰(拙稿「キリストン教徒内の非公頃日本人、II 教会組織の構成と問題及び教会と日本人の関係について」参照)などをあげることができるが、両者は密接な関係を持ち両者を組み合せた形での批判も多々見つかれる。例えば、一六一七年二月二日マウチオ Vitelleschi ものヒュイラ宛の書翰 Jap-Sin 3 f.54 等

(Jap Sin 3 については上智大学キリストン文庫架蔵写真版本によれ) なお、高瀬弘一郎『キリストン時代の研究』五四~六八頁参考。

(51) 一六一五年一月五日付マカオ発マヌエルディアスの総院長宛書翰、高瀬弘一郎「キリストンと統一権力」(東波譲座『日本歴史』九一一) Schütte, II Cermoniale (24) pp. 140-3 「モソソ達は慣習通り、口だけは帶びておへよへど」 あたへハ ババ外の修道士の中へは使用つてこだ。León Pagés, Histoire de la Religion chretiene au Japon II. Anne-

- xes p.357. 「ルルニミタスミ、ヘリヤ・グリマムニハシム回顧公  
トハ、ルレニ奉仕人“ケルが……”」(ヘハニミヒトミタスミ)(3)  
五郎政(糸参考)
- (52) 柳谷祐夫『ヘロイバ・日本史』1-1-1回目  
(53) Evora I f.139. (本上『週刊』輪轍上 千十回)
- (54) Alvarez, Sumario p.186. n.6, Boxer, Christian Cen-  
tury p.223
- (55) 1401年 1月一六四 Catalogo Br. Jap-Sin, Schütte  
Monumenta I p.462. 皮ヨルシ n.22, 1401年 1月  
Catalogo Br. Jap-Sin, Ibid. p.451, (“[o]s cambos que  
são os que têm cuidado das igrejas” ルヌの職務課の史  
表) (56) 1411年 Pasio Obediencias Cap 10°. §8 (総  
務) (57) 1411年 1月 1401年 Jeronimo Rodrigues,  
Breve Relação do número dos obreiros e dos lugares  
por onde discorreram, desde anno de [1] 614 atté o  
presente de [1] 617, por Japam, ocupando-se encon-  
servar e cultivar aquelle christandade, todo o tempo  
desta última perseguçam Ibid p.708 (職務の起と數  
多へ職務の記録)
- (58) 1401年九月 1501年十一月 Evora I f.231 1401年  
九月 17世紀とは「かへるのもの」といふ。 1401年 10月  
ベラダトカ太宗總領官院宛文書 1401年 10月  
S.J. Introductio ad Historiam Societatis Jesu in Japo-

nia 1549-1650 pp.178-9., 1411年 Catalogo domorum  
Schütte, Monumenta I p.549, [1411年 10月] Cata-  
logo Baeve Provincia de Japon, Ibid. p.551 等。

(59) 日本文書ニシテハ故漢書の日本語による表現例ヘコレザ

元和川年 (1417) ポーロス徵取文書に「かんせりノ帳面夷す  
ル」Cambō Sōket Justo, 「かんせりノ帳面夷す」Cambō Joqui

Miguel, 「ヨリ帳面くらべル」 Cambō P. ルスのた例がみら  
れ。 (糸田義 1「近世初期日本國係種史類の研究」所取)

(60) Jap Sin 2 ff.135v-6, Ajuda 49-IV-56 f.160 なれば既  
に 1401年の文書の文書に於て Regimento pera os Padres q  
estão nas residencias de Japão もとを同様の規定を見  
る。 Jap-Sin 49 f.246v.

(61) cap 7° § 14° Ajuda 49-IV-56 ff.155-v. もだ、ルの方  
金の回様と 1401年の文書に於て定められた。前述の  
Regimento pera os Padres……とは次のようと書かれて  
る。 「ルレルの神〔看坊〕の維持のため、村人達に対し、彼  
ら〔村人達〕おるの坊主 bonzos に依つて行なつてある。 おる  
に、彼ら〔看坊〕を援助するように努めねばれどある。 おる  
は、〔村人達が〕金員一緒に彼ら〔看坊〕に毎年十分なものを  
与へるかのためにはりぬるのを知る。」 反の〔土地〕

金員の種をあげて、おるこせ、十郷やむの他、おもへたがゆ  
の他の方法を採つて〔看坊が〕もとあたひつて出来事に出会ひ  
た時〔困難な時〕には布施でもうて彼等〔看坊〕を援助するよ

「などある所へだ。」 Jap-Sin 49. f.246v.

(60) 補(55) 参照。たゞ補(33) と示すしたロハラの史料によれば「一母體と日本ヘハダケルが賣手總經理」から「西田の母」、「教會の監視と申されを行なつてこゝに着邊に安する支那」〇〇「ペニダナ」として記載がある。Schutte, Monumenta I p. 538.

(61) Schutte, Introductio p.380 (Jap-Sin 20 II f.154v)

Ibid.

(Jap-Sin 20 I f.72)

Ibid. pp.178-9.

(62) Jap-Sin 49 f.246v. Regimento para os Padres.....

「名々ナカにいれる者（看坊）のうちの一人が、これとばやねたらかへ、名人といふ一団のマナカを一緒ににして出かんとかやめぬまへに」とおねいじかる。一五八〇年代初頭には看坊はこの中のマナカの教會をかみやめで管理してこたのやうだ。しかし、十七世紀にばれてから改教とおひわれる看坊の人数と教會數は、教會が若干看坊を上るねりこねが、せせ一枚ことながらてこゝ。最も、看坊は序々にマナカの教會を一人ずつ支配するものとなつたのである。（拙稿「キリストン教徒の禁酒風潮日本人、II 教會組織の構成と問題及び教會と日本人の關係」としての表参照）

(63) Jap-Sin 2 f.102.

(64) Alvarez Adicones p.655, 鹿原は茶の湯者であるが、問番にもおだいだねむだ、鹿原交際にかかる船主を押廻しする

だんじだだ。こゑの鐵原を餘人じゆる、因幡が漁業者じゆるいた。

(65) Ajudia 49-IV-56 f.157. たゞ禦襲捕した rapados の記録で、一般的な禦襲捕を指す場合もあるが、この場合は因幡の因幡と書くべきだ。おおせ八章二項と os dogicos Rapados とおおじるかの軍隊ドガノ。ふたばんの正題を二つと因幡と、dogicos de pregadores, dogicos de congregação, dogicos rapados ルコトコノ f.156v. (概要及る補(33) 参照)

(66) Jap-Sin 2 ff.100v-101 Regras do Yacunin cf. Regulae pp.26-9, mestre de casa, pp.52-5 comprador.

(67) Schutte, Monumenta I pp.493, 494.

(68) | H.R. |母| |四 Catalogo Breve Japan; Ir. Ambrosio Fernandez, tem cuidado da casa, Ir. Guaspar de Paiva, tem conta a casa, Ir. Francisco Fernandes, tem cuidado da casa, etc. (Schutte, Monumenta I pp. 286-8) | K.O.|母| |四 Catalogo Breve Jap-Sin; Ir. Ambrosio Fernandez, sotoministro dos moços da cozinha e despensa e de mais provimento da casa, Ir. Cuiá Peró, tem cuidado da despensa e cozinha, Ir. Firata Jorge, corre com a despensa e cozinha e mais ofícios da casa. (Ibid. pp.443-9) たゞ、鹿原は鐵原の船主で、おおじるかのトローネー・ヘヌチ・ヘリケダの船員である、役人の職務には廻仕事やおいた山林工作がある。ロハラの船

人に顯の効く彼を、積極的に役人の職につけ、その前歴を利用して  
つかむんだのか知れない。彼の入京の経緯については、

J. F. Schutte, S.J. Erinnerungen aus der christenheit  
von Omura pp.82-5 及ぶの如(?)参照。

(2) Jap-Sin 2 f.102v. Regras do que tem conta de agasalhar os hóspedes §12°, f.114v. Regras do procurador de Japão § 5°.